

view point

THE SAISON FOUNDATION

69

セゾン文化財団ニュースレター第69号
2014年12月5日発行
<http://www.saison.or.jp>

公益財団法人セゾン文化財団

The Saison Foundation Newsletter — 5 December, 2014

目次

- 高谷史郎◎舞台芸術というレンズから見える風景…………… p.01
- 勝部ちこ◎ブルキナファソらしっど!?…………… p.04
- 廣川麻子◎みんなで一緒に舞台を楽しもう!!
～特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの取り組み～…………… p.06

Article—①

舞台芸術というレンズから 見える風景

高谷史郎
Shiro Takatani

舞台芸術との出会い

今年で30周年を迎えたダムタイプには設立当時から関わっていますが、舞台芸術に興味があってダムタイプに入ったわけではありませんでした。大学では環境デザインを学び、建築や空間造形に関心がありました。ダムタイプの活動に関わり始めた当時、最初に思ったのは、劇場というのはラボラトリー(実験施設)のようなところだ、ということでした。例えば小さなものであれば、自分のオフィスで模型を造って見るということが出来ますが、大規模な構造物の場合、それがどのように見えるのかは、劇場のような大きな空間でないと分かりません。

劇場なら、たとえば大きな階段状の舞台を造ったとして、どのような照明が当たると、どのように見えるか、という実験が出来ると思い、それで、イメージを具体化するための実験的な施設として、劇場に関わってモノを造ろうと考えたのです。しかし、実際には階段単体で良いということはあまりなく、舞台にどういうふうに「人」が存在して、その人がどういうことをしているのかによって、美しく見えたりするのだと気付きました。そのように劇場と関わり始めたわけですが、いまでは劇場というのは、パフォーマーを観るための空間であると思っています。そこに僕がどのように関われるのだろうか、今も試行錯誤しています。

舞台芸術における「公平性」について

僕はインスタレーション作品も創っていますが、インスタレーションは、どのように作品が観客に観られているのかは分かりません。作品の鑑賞は自由に観客に委ねられているので、たとえば、18分の映像インスタレーションを展示しても、途中で飽きれば5分で立ち去るかもしれないし、作品を最初から見て欲しいと思っても、観客がどのタイミングで展示室に来るか、大抵の場合、コントロールすることはできません。

それに対して、劇場というのは、観客とある一定の時間を密接に共有する場所です。パフォーマンスの上演中は客席後方のオペレーショ

ンブースにいますので、お客さんの反応がとても気になります。最初は誰もいない劇場でリハーサルをしながら作品を創り、次に関係者だけでゲネプロを行い、そして本番で一般の観客が入りますが、観客の反応を受けて舞台の見方がリハーサルの時から極端に変わる時があります。そのような観客とシェアしている感覚が、インスタレーションとパフォーマンスの違いです。

パフォーマンス作品に取り組んでいるのは、舞台あるいは劇場という機構が自分にとって実験室であると同時に、製作の仕組みにも関心があるからです。

例えばインスタレーションなど美術作品は、観客は美術館や画廊などで安い入場料(あるいは無料)で作品を観ることができて公平なような気がしますが、それは基本的に、美術館や個人のコレクターが作品を購入しているから成立しているものであって、誰か財力のある人/機関が作品を買ってくれないと成り立ちません。

けれども舞台の場合、多くの観客がチケットを購入することによって公演は支えられています(もちろん、上演の全ての費用がチケット売上だけでまかなえる訳ではないのですが)。例えば京都の公演に友達を誘って、3,000円とか4,000円くらいで観に来てもらい、その後に作品が駄目だとか良いとか、対等に話が出来ます。作品が面白かったと言ってもらえればもちろん嬉しいが、面白くなかったと言われれば、どこが面白くなかったのかと話す中で、ああ、いまそう考えている人がいるのかと思うこともあるかもしれない。また、3,000円や4,000円くらいでそこまで文句を言わなくてもいいやないか、というやりとりも可能です。つまり、舞台は、美術のような特定のパトロン(美術館/コレクター)ではない、一般の複数の観客が、ある一定の時間を共有する目的でお金を出しあって成立させている。そこに公共性とも言えるものがあり、舞台芸術はアーティストと観客にとって公平で、多くの人とシェアできる、民衆的なメディアだと言えます。

強力なメディアとしての身体

僕にとって身体とは、音楽、映像、光、空間構成などの要素の一つであり、身体性という意味で僕がパフォーマンスに興味があるのは、それぞれのパーフォーマーやダンサーの、その人自身から滲み出るものです。その人の最も本質的な魅力を、拡張、あるいはより良く伝えるシステムを舞台上に組みたいと思って作品を創っています。

僕の作品には、映像先行のシーンもたくさんありますが、パーフォーマーと話し合っているうちに、映像だけのシーンに身体が入って来て、少しずつ映像を変更して、フィットさせた例があります。不思議なことに、当初は身体がなくて成り立っていた映像と音楽だけのシーンに、あとからパーフォーマーを加えると、もうそのパーフォーマー抜きでは考えられなくなるのです。そこに身体の強さを感じます。自分としてはフラットに扱いたいと思うのですが、お客さんはパーフォーマーを通して舞台を観ているところがあり、やはり生の身体は強力なメディアだと思っています。



ダムタイプ作品『pH』(1990年) Photo: 高谷史郎

日本と海外で活動して見えたこと

最近ヨーロッパのプロモーターやプロデューサーと話して感じるのは、多くの劇場がコンサバティブ(保守的)になってきているということです。以前のような冒険や挑戦を極力しない。『明るい部屋』という作品を創った時に(*注:ステージが中央にあり両側に客席を配置した舞台)、僕としてはプロセニウムの形態からはみ出た、フリースペース仕様のインスタレーションに近いパフォーマンス作品を目指したのですが、そういう作品はなかなか上演してくれる場所がないのです。500席の劇場なら、500人が入るような作品を求められます。本来の客席を使わずに、舞台上に舞台と客席を仮設で設置するような特殊なことは、消防法などの問題もありますが、実現することは本当に難しい。『pH』など、ダムタイプが1990年代に創った作品では無茶苦茶なことをして、劇場ではない空間でいろいろやっていたのが懐かしいです。

でも日本にも、元は小学校だったところを使っている「にしすがも創造舎」など、本来は劇場ではないところもあります。アートは次々と生まれ、その時は面白いものであっても、アートとしてのクオリティを保てるメディア(媒体)はそれほど出てくるわけではありません。そのメディアがアートとして存続して行けるかどうかは、使い続けないと分かりません。今後日本や海外のアーティストは、いろいろな方向性で作品を創ることについて真剣に考えるべきだと思います。それが良いものであれば残ります。何が残るのが分からないからこそ、あらゆる可能性を探り、サポートして行く必要があります。この点では、日本と海外では差がないように感じます。

日本で活動することについて

友人たちの中にも活動拠点を海外に移すアーティストがたくさんいます。ヨーロッパの方が発表の場も多いだろうし、そういう意味では活動しやすいのかもしれませんが。アーティストの数も海外の方が多く、層としての厚みがあると思います。



ダムタイプ作品『OR』(1997年) Photo: Arno Declair



高谷史郎作品『明るい部屋』(2008年) Photo: 福永一夫



ダムタイプ作品『MEMORANDUM OR VOYAGE』(2014年) Photo: 椎木静尊

僕が日本にいる理由は、日本が好きだからです。来年フランスで新しい舞台作品を創ることになっていますが、舞台装置にしても、日本で造った方が自分の思うようにコントロールができるのですが、海外だと、クオリティのコントロールが大変です。

具体的な例を挙げれば、今年(2014年)東京都現代美術館の「東京アートミーティング 第5回 新たな系譜学をもとめて 跳躍/痕跡/身体」という展覧会(2015年1月4日まで開催)にて、9月27日から11月16日まで展示していたダムタイプのインスタレーション『MEMORANDUM OR VOYAGE』は、ソニー PCLが運用している4Kビジョンを使っています。約900万個のSMD(基盤表面実装型LED)のディスプレイなのですが、そのうち、接触不良で消えているLEDがあったりすると、それを、僕たちが指摘する前に、担当者がそのパネルから消えている一粒1ミリくらいのLEDをピンセットで取り出して、新しいものをはんだ付けしておいてくれるのです。その日本的な、職人意識の強いきめ細かさが素晴らしいです。

また、近年は、坂本龍一さんや樂吉左衛門さん、渡邊守章さん、野村萬斎さん等の方々と一緒に仕事をすることが多く、日本にいるからこそ出来るコラボレーションがあります。

ダムタイプとして12年ぶりの作品

—その集団性と今後の可能性について

上述のインスタレーション作品『MEMORANDUM OR VOYAGE』は、ダムタイプとして12年ぶりの新作です。なぜいままで12年間ダムタイプの作品が出来なかったのかは、このようなオファーが無かったということもありますが、以前一緒に創っていたメンバーが忙しくなり、会う時間がなくなってしまったからです。

しかし、考えてみれば、インスタレーションの場合、今までダムタイプで創るときも、全員総がかりでというわけではなくて、何人かコアのメンバーがアイデアを出し合って創っていました。だから今回、これを機に新しいメンバーと新作を創りたいと思ったのです。同時に、古いメンバーにも声をかけ、参加出来る人には参加してもらいました。泊博雅さんはいつものように映像の重要なパートを担当してくれましたし、昔の音源を再構成するにあたっては池田亮司くんという意見交換しました。過去の音源や映像を、新作インスタレーションとしていかにトラックダウンする(まとめる)かが、今回新旧のメンバーにとってのテーマでした。

ここで一つ重要だと分かったのは、アーカイブ的な作業への取り組

みです。今回は、十数年前のハードディスクがまだ動いたので、昔のデータを変換してラップトップのコンピューターに入れられました。そうしておけば、過去のハードウェアが壊れて動かなくなった後でも、データは生き続けます。ダムタイプはビデオテープの時代から活動していて、セゾン文化財団から複数年にわたる助成をいただいていた頃(1993年度~1996年度)に、ベータカムとM2の編集機を買いました。そのテープが山ほどあるのですが、これを何とかしないとのうち観られなくなります。本格的にアーカイブをつくるとなると、時間がかかって大変で、そこに時間を使うのなら、アーティストとしては生きている限りは新しい作品を創りたくります。しかし今回の経験から、『pH』など他の作品も、いまのうちに新しいフォーマットに変換する必要がありますかと思いついています。

ダムタイプはフラットな関係ですが、創作に時間がかかります。そこがまたダムタイプの良いところで、みんなに時間があって、ゆっくり創れるのであれば理想的です。ダムタイプというのは、みんながアイデアを出しやすい「箱」だと僕は思います。出来た作品は参加したメンバー全員で共有できます。ダムタイプが「箱」であれば、昔のメンバーが忙しくて参加出来ないからダムタイプの作品が創れないというのは変だと、今回のインスタレーション作品を創って思いました。だからこれからは、新しい人たちが創って行ってくれるのも面白いと感じますし、そこでいい人たちが集まれば、いい作品が出てくるだろうという気がします。



高谷史郎(たかたに・しろう)

84年より「ダムタイプ」のメンバーとしてパフォーマンスやインスタレーションの制作に携わりビジュアルワークを総合的に担当。90年からダムタイプと並行して個人の活動を開始、主な活動としては、05年「雪と水の対話」展(ラトビア国立自然史博物館)。07年 北極圏遠征プロジェクト Cape Farewell(イギリス)参加。08年 パフォーマンス《明るい部屋》初演(Theater der Welt, ドイツ)。12年 パフォーマンス《CHROMA》初演(びわ湖ホール)。13年 東京都写真美術館で個展。14年 札幌国際芸術祭参加など。また、坂本龍一、中谷芙二子、樂吉左衛門、オノセイゲン、野村萬斎、渡邊守章等との共同制作作品も多数。

<http://shiro.dumbtype.com>